
ギャンブルナイトの悪夢 ～ これ以上は、無理！ ～

廣瀬 るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギャンブルナイトの悪夢 〽 これ以上は、無理！ 〽

【Nコード】

N05890

【作者名】

廣瀬 るな

【あらすじ】

“パーティー” それは女子の憧れ。華やかなドレスに、目一杯テクを凝らしたメイク。スマートな彼氏を傍らに、シャンペングラスを傾ける。それがカジノパーティーと言えばなおさらの事。しかしここに居る彼女はそれどころでは無い様で……。

自分を負け組だと思っている、片思いの女の子のお話です。

前編（前書き）

恋愛遊牧民様 <http://g-nomad.com/>
の短編企画参加作品です。

お題は 『これ以上、無理！！』 お楽しみくださいね

もちろん！ お話はフィクションです

前編

いつまでこんな事続けているんだろう。英梨^{えり}はシャンペンのほっそりとしたグラスを持ち上げ微笑みながら、瞳の奥でため息をついていた。ここは六本木、夜八時。某パーティールーム。某テレビ会社が某海外有名リゾート地と提携企画したカジノパーティーでの一コマだ。

ガラガラと回るミラーボールがバブリー。紫煙が漂い、中央ホールではカルテットがジャズのスタンダードナンバーを奏で、高らかな笑い声と、ルーレットの回る音が響いていた。そして目の前には、大好物のピクルスとチキンを挟んだ美味しそうなサンドイッチ。昼飯を食べ損ねていた英梨のお腹は、もつと食べたい！ とギューと鳴き、胃が鈍く疼^{にぶ}いた。

「それじゃあ金井さんは出版関係のお仕事をしていらっしやるんですね？」

目の前の女は薄笑いで自分の名詞を差し出す。

「奇遇ですね。私もそうなんですよ」

魅力的な胸元には巨大なフェイク・ジュエリー。綺麗にほどこされたフレンチネイルに、自信ありげな微笑み。しかも、名詞にはメジャーなファッション誌の名前が書いてあり。

「ありがとうございます」

受け取りながら英梨はチツと心の中で舌打ちをする。どこから見ても彼女に勝ち目はない。英梨のルックスは月並みで、迷った挙げ句に選んだ黒のストラップドレスも、こんな華やかな場所においてはただの

“濡れ羽のカラス”

綺麗だけど、闇にまぎれて目立ちやしない。気合い入れて作り込んできたはずのメイクも、睫毛ばさばさエクステ三昧の女子の敵じゃない。クリップでアップに止めた髪の毛は中途半端に落ちてきて、

色っぽいというよりだらしないなって自分でも分かってる。しかも彼女の会社は出版社と名のつたら恥ずかしいってクラスの超三流。担当は正体不明な占いを載せるフリーペーパー。英梨でさえ信じていない、かなりいかげわしいヤツ。正直他人にそれを言うのは恥ずかしい。でも社交辞令だ。

「私の名詞もお渡ししておきますね」

もしかして手刷り？　とても思われても仕方がない様な、ちょっと規格外の名詞がほっそりとした女の手に渡る。赤紫のどぎついマーブルの上にピンクのハート飛び交う下地に、白でくつきり

「金井英梨　B型　牡牛座　」

今時女子高生でも持たない趣味だ。洗練された感じのその女は、一瞬笑いを堪えた後、

「素敵ですね」

と、彼女の隣の男に向かって、笑った。

素敵なはずがないだろうが！　英梨は歯を食いしばりながら残りのシャンペンをぐいっと飲み干し、

『今度の週末、パーティー有るんだけど、誰も同伴してくれる女性がいなくてさ。頼むよ』

と泣きついてきた男の顔を見た。この男、無駄にハンサムだった。いわゆる、水も滴るナントやら系。放送業界の仕事をしていて、はつきり言って、する事なす事チャライ。名前は貨島^{かしましん}？。どこことなく人を馬鹿にした名前だと、英梨は昔からそう思っていた。その

“ 相手がない ”

はずの男は、嬉々として偶然再会した

“ 仕事上の知り合いの ”

年上濃厚、魔女系熟女と、英梨をダシに話し出す。ってか、このパターン、彼の知り合いだと称する美女がフラッと現れ、あら、お久しぶりと挨拶をする、は今晚すでに三回目。にやけた顔の

「彼女さ、あつ、英梨は俺の彼女なんだけど」

完全にとってつけたって感じの聞き飽きたセリフ。

「彼女の担当している占い雑誌、結構当たって評判らしいよ」

“俺の彼女”

基本的に？は一緒にいる時の英梨を他の人にそう紹介した。と言っても現実が違う。高校からの腐れ縁、悪友、彼にとつての

“虫除け”

なんとも呼べ。現実の所、二人はキスどころか、手をつないだ事すらないのだ。まあ、たまには肩を組む事はある。まるで男友達みたい。そんな彼女を尻目に、

「じゃあ、早速占ってみちゃおうかな」

魔熟女（仮名）は名刺のQRコードから携帯のサイトにアクセスをした。そして

「凄い、今日の英梨子さん、物凄いついていてらしいわよ！特に賭け事が幸運を呼ぶらしいわ」

とわざとなのかどうなのか、英梨の名前をおもいつき間違えながら媚を売る。そして女子お決まりの

「私はどうかなあ」

（ここで一旦、ハートのマークが飛ぶ）

「えゝ、嘘！」

から始まり

「それじゃ、？君の運勢も見てみようね」

再び、ハートが飛ぶ、へと続き、

「やだ、？君と私の相性つて、かなり良いかも！」

と盛り上がる。二人で、勝手に。そのうち肩なんか寄せ合っちゃったりなんかして。

好きにすれば良い。英梨は取り繕うはずだった上品さをかなぐり捨て、目の前のチキンサンドイッチにかぶりつき、三口で平らげると「お二人でごゆっくり。私は遊んでくる」

入り口で配られた偽100ドル札 10枚をぴらぴらと振り、くると背中を向けた。

どうせいつものパターンだ。分かっているけど、辛い。狡い？は

適当に女を引っ掛けて、いざって所で

“ 平凡で見捨てられない ”

事を理由に、英梨の所へ戻ってくる。英梨は体よく女性を振るための口実なのだ。細身のシルエットにイタリアブランドのスーツ。いつもサンタ・マリア・ノヴェッラの清潔で繊細な石けんの香りを漂わせ、モデルの様にしなやかな仕草で周りを魅了する。まるでプリンス。だから、束縛されるのは嫌いなのだ。例えそれがいかに綺麗な女性でも。そして英梨はいつだって安全基地、母親。元高校バレーボール部主将の太い腕に、がっしりとした腰回り、なんちゃってモデルな背の高さ。イタリア語で言う所の

“ マンマ ”

そのもの。そして

“ ママ ”

は彼の

“ 女 ”

にはなれない。

華やかなドレスは嫌い。ハイヒールも、豪華な宝石も、美人も嫌い。セクシーなんか死んじまえ！ こんな夜にまぎれ、それなりの化粧をして、彼に女として見てもらいたい、だなんて考えるのが馬鹿だったのだ。それはまるで勝ち目のないギャンブル。開き直った英梨は背中に彼の視線を感じて振りかえる。？の左手の上には熟魔女の右手が重なるように動き、指輪に引っ付いているばかりで宝石がキラツと光った。彼の空いている右手を可愛く振られ、お返しに新しくもらってきたワインのグラスを高らかに上げてやる。

「 乾杯 」

一気に飲み干して、もう一杯のワインを片手に引っ掴み、大股でカジノ台へと歩いていった。

後編に 続く

前編（後書き）

某テレビ会社が某海外有名リゾート地と提携企画したカジノパーティー

本物バージョンのレポート 西麻布 は

<http://hirosenaga.exblog.jp/14038882>

良かったらどうぞ。

後編（前書き）

後編

この日、英梨は正に

“ビギナーズラック”

競馬もパチンコも、宝くじさえ買ったこのない彼女がつきまわった。するのは当然、ルーレット。赤か黒か。ついでに数字は適当に賭けていけば良い。最初は小さな金額で賭けていた英梨だったが、次第に大胆になり、掛け金もせり上がる。そして目の前にできるチップの山、どよめき。大掛かりなパーティーでいずれテレビ中継も有ると言う、そのカメラクルーが運氣をつかんだ彼女にスポットライトを当てる。

会場の雰囲気は最高潮に達し、沢山の人達が覗き込む様にルーレット台に集まっでいて。歓声に惹かれた？が、いつの間にか彼女の後ろで目を輝かせて立っていた。

「凄いじゃん」

はつと振り向き見上げる英梨に

「……」

何かを話しかけた。

「えっ？ 何？ 聞こえない」

彼は彼女の耳にかかる髪の毛をそつと指先で摘まみ上げ、

「今晚の英梨ってかなりいい感じ」

耳に唇を触れさせながら、そつと繰り返した。瞬間、彼女の軀に電撃が走った。

「いつ、嫌っ」

小さな悲鳴は、大勢の人に押される力にかき消される。彼は成り行きでなのか、図ったのか、英梨の真後ろにぴったりと体を寄せ、背中から抱くかの様に立った。そして両手を彼女の脇から前に出し、ルーレットテーブルに自分の分の偽札も置いたのだ。

「俺の分も一緒に賭けてよ」

背中越しに彼の心臓の音が聞こえ、暖かい体温を感じた。それから「英梨が赤だって言えば、俺も赤。英梨が黒だって言えば、俺も黒。俺、人生の全てを英梨に賭けてるから」

などと、意味深な言葉を口にした。

軽快なジャズのリズムに、人々の熱気、ホイール（回転盤）の回る音。そして英梨を包み込む男から立ち昇るガーデニアの香りと、のど仏の奥から聞こえる低音の笑い声。

全てが熱に浮かされた様だった。

勝ちが来る。そして小さな負けが来て、再び大きな勝ちのうねりが来る。？のチップも倍になって積み上がり

「やったね！」

彼は英梨の頭に頬ずりし、さも恋人を労るかの様に、両手で彼女の腰を抱きしめる。ディーラーが片方の眉を上げ、わざとらしい仕草で“分かっていますよ、お幸せに”

のベタな表情。

「放してよ」

泣きたい気分。

「良いじゃないか。今、みんな盛り上がってんだし。照れるなんてもう、大好きだよ、英梨」

彼は一層彼女にすり寄り、開けたジャケットの内側が彼女の剥き出しの肩を滑る様に撫でる。英梨の我慢も限界だった。これ以上、彼の傍にいる事すら辛い。好きだから、好きだからこそ中途半端な

“大好き”

は、鋭く彼女に突き刺さる。

「それでは最後の勝負になります」

ディーラーがベルを鳴らし、最後の賭けを促す。英梨は一切合切を黒の24に賭けた。駄目で元々。

“ブラックで駄目駄目な24歳”

英梨は勝手に下手なオチを付けた。そのとき突然閃いて

「私ね……結婚するから」

相手もないというのに、一世一代の大嘘が彼女の口からこぼれた。
「もう、こんなの、無理」

こうやって女としてみてくれない男に人生費やして、朽ちていくなんてまっぴらご免。きつと明日になったら朝一で結婚相談所に飛び込んで、誰でも良いから相手を見つuckerんだ。その時、目の前のデイーラーが大きな身振りで球をルーレットに向かってトスした。
「それって……」

？はきよとした顔で立ちつくしたかと思うと、

「やっとその気になってくれたんだね！」

と店中に響く様な大声で叫んだ。盤の上で球が跳ね、カラカラと音が鳴り響く

「はあああああ??？」

彼は英梨に巻き付けていた腕に力を込め抱え上げると（どこにそんな力&スペースがどこに有ったのか）周りの人の山も何のその。ぐるぐるぐるぐる、彼女を回し始めた。

「やったあ！」

世界が回る、目が回る、ルーレットも回っている。ついでに、気持ち悪い。

「?、止めてくれえ」

英梨は情けない声で懇願した。

「死ぬ」

絶対これは悪夢だと思った。周りのみんな、総立ちで拍手。でも、彼らですら何が起こっているかよく分っていない、とりあえず笑っておけ、な笑い顔。

「ヤッホー！ やつと俺と結婚してくれる気になったんだ!!」

これは新手のびっくりか？ やつと下ろしてもらえた英梨は、ふらふらしたまま思わず？にしがみついていた。

「もう、心配させるなよ、英梨。俺とは一緒になつてくれないのか
なつて、もう無理かなつて、諦めそうになつてたんだぜ」

抱きしめる彼の腕の力が弛む事はなく。

「へっ？」

見上げた彼女の唇に、彼の唇が重なった。

「むぐぐっ……」

キスするのが初めてだ、とは言わない。でも、これほど前触れもなくキスされた事はない。しかも、ぜんぜんロマンチックじゃない。思わず息を止め、すぐに胸が苦しくなり

「きゅ〜」

バタバタと彼の胸を拳で叩いた。

「あはははは」

？、笑い。

“ 笑うな！ ”

とつちめてやりたかったが、周りの歓声がうるさく、それどころじゃない。――どこかでランコロンとベルが鳴る。何とか呼吸を落ち着け、へらへらと笑う彼をキッ！ と睨めつけた。

「あんた、何ふざけてんのよ。何で私が？と結婚するわけ？ 第一、私、あんたにプロポーズされた覚えなんかないんだから！！！」

いい加減、この茶番を終わらせたかった。そのはずが

「分かった、分かった。英梨が忘れたって言うんだったら、まっ、しょうがないか。ってか、そんなに怒るなよ」

訳の分からない事を言い始め、両手を軽く上げたかと思うと、周りのみんなに

“ 静かに ”

の優雅なポーズ。ギャンブルナイトで大騒ぎの会場は微妙な揺らぎを生んでいた。

英梨はなんだか悪い予感がした。

“ 忘れている？ ”

過去に何か有ったっけ？ 　ってか、確かに初めて会ったとき、こいつに

『俺と結婚しよう』

と言われ、

『10年後に生きてたらな』

と答えた記憶は有った。ってか、それがプロポーズ？ いや、それはないでしょう？ 無理矢理笑い飛ばそうと、ぎこちない笑顔が頬に浮かび上がる。なぜか人々は固唾^{かたず}を飲み、誰の指示なのかバンドも音楽を止め、静寂の空間が広がった。いつの間にか二人の周り半徑一メートルから人が撤退していて、？はもったいぶった仕草で腰を落とすと片方の膝を床に着き、右手を自分の胸に当て彼女を見上げた。

「鳥井英梨さん、俺は一目見た時からあなたが好きでした。愛しています。この12年間、この気持ちは変わりません。結婚してください！」

どこかで煌めくフラッシュライト。それから、明らかに写メのシャッター音カシャッ！ カシャッ！ カシャッ！

『肖像権の侵害だ！』

と叫びたくても、英梨は魔法にかかったかの様に体を動かす事ができずにいいた。それをどう勘違いしたのか、彼はいかにも誠実そうな、なかば涙目で英梨を見上げた。

“それって反則！”

泣き出したいの自分だよって、英梨は思う。こんな茶番は嫌だった。本当に誠実な人間だったら、ひっそりと二人っきりで告白するってのが筋じゃない？ 見下ろす彼女の頷く気配を感じる事ができず、彼は続けた。

「一生、英梨の事、大事にするから。ここに居るみんなが証人だ」

“うん、うん”

なぜか全員一致で頷くギャラリィ。これは、マスゲームか？ いや、罰ゲーム！！

「英梨は俺のプリンセスだ。俺は一生、えりいの下僕として生きる！」

ああ、下僕ね、確かにね、それも良いわよねって、いや、違う！
彼女は大きく口を開き、声にならない言葉を発しながらその唇を

横にぐつと引き絞った。つまり、

「“はい”って、言ってくれたね！」

たしかに、唇はその形で動いていた！

「キャ~~~~」

どこかで歓声、

「素敵」

「ロマンスだわ~~~~」

だとか、訳の分からない女の子の叫びが聞こえ、

「絶対、無理！！！！」

の絶叫はかき消され

「むうっ！」

えりいが気がついた時には、？の腕の中で息が苦しいほどハグされていた。

フラッシュライト、カメラマン、インタビュー、満足そうに笑うパーティーのスポンサー！。

「新婚旅行は、セントーサ島のスパ・ヴィラで二人っきりで過ごそうね」

いつの間にかマイク片手に唸る？。喝采。割れんばかりの拍手。そして男は何が起こったか分からず茫然としている英梨の耳元で囁いた。

「今の映像、ケーブルテレビで全国配信される予定だから、楽しみにしていてね。みんなに祝福してもらえるから」

再び祝福のベルが鳴らされて

「おめでとうございます。24の黒！ お嬢様の勝ちです！」

洪水の様な拍手が英梨を襲った。

かくして、ギャンブルナイトは更けてゆく。

後の風の噂によると、？が他に女がいる様に見せかけたのは、英梨の気を引くためだったとか。その度に目論みは挫折し、ただ素直に英梨の元へと戻ってきては、まるで弟みたいにあしらわれ、何度も負け越していると感じていたらしい。

「だったらさあ、素直に好きだって、“愛している”って直球で言えば良かったじゃん」

二人きりで夜景の綺麗なレストランに誘うとか、手をつないで、見つめ合ってキスするとか。

『今晚、泊まっていける？』

『うん』

だとか、もう味わう事のできない、

“つき合っているからこそそのドキメキ”

をぶつぶつと後悔し、英梨はハネムーンのリゾート地で拗ねていた。
「だから、これからは毎日“愛している”って言うから。その代わり英梨も俺の顔見たら“愛してる”って言うんだぞ」

？はそんな英梨にすり寄り、ひょいっと顎を持ち上げるとぱくつと彼女の唇にキスをした。

「嫌だ、無理！ 絶対恥ずかしいって」

彼女は最後の悪あがきをした。

おしまい

後編（後書き）

最後までおつき合い頂き、ありがとうございました
もし良かったら皆様の 感想＆評価 お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0589o/>

ギャンブルナイトの悪夢 ~ これ以上は、無理！ ~

2010年10月10日10時19分発行